

# 戦前期根室地方における図書館の歴史

## 2

—共同根室文庫—

谷 口 一 弘

### はじめに

根室地方における図書館設立の動きは、この地での開拓行政が始まってまもない時期であった。それは、明治2（1869）年10月に開拓が着手されてから7年後の明治9（1876）年12月、官立花咲学校の開校とともに、翌年1月同校に付設された花咲学校備付書籍室をその嚆矢とする。

この花咲学校は、当時の根室地方を中心とした道東地域最大規模のモデル校として位置づけられてスタートしている。学校開設当初から校長山本由方の熱意のもと、児童・生徒を対象とした教育に止ることなく、丁年者のための夜学を設け、また根室支庁（明治5年9月機構改革により出張所から支庁となる）からは理化学器械及び同薬品を借受け、その実験を一般公開し、児童・生徒だけではなく地域住民へも理化学的知識の普及を図っている。

さらには、随意科を設け年長生徒から選抜して、卒業後に小学校教員になるべく養成を試みたりもしている。また児童・生徒に農作物の試作を指導し、あるいはアイヌの子弟のため校内に教育場を設けるなど、根室支庁の支援を受けながらの、開拓に結びつく実学的要素を積極的に取

り入れた学校運営が図られていた。

従って、学校備付となった書籍室もまた、児童・生徒をはじめ根室在住者には「書籍ヲ宅下借用スルヲ得」（「書籍貸与仮規則」第1条）として、備付書籍借覧の便を与えている。また、教員には「教授上必用ノ書器類ヲ借用スルヲ得」とし、さらに「時宜ニヨリ一週間ヲ出サルノ期限ヲ以テ宅下借用ヲ許ス」（同第3条）と、教員には「書器」として学校備付書籍のほかに根室支庁から借用の理化学器械類についても貸出しの便を図っていた。

いわば、花咲学校はその備付書籍室の機能を、当時の根室地方での文化的・実学的情報発信の拠点と位置付けようと意図されていたものとみることができる。

しかし、実情としてはこの花咲学校への期待も、開拓使根室支庁（明治15年8月から機構改革により根室県となる）の都合に左右されていた。再三にわたる移転仮校舎、あるいは火災や震災さらには大戦中の空襲等に遭遇し、根室在住者に広く開放した備付書籍室としての実質的な活動期間は、その活動実績もみられないまま、明治15（1882）年の早い時期で終わっていた。

その3年後、明治18（1885）年1月、この花咲学校備付書籍室の使命を継承する形で、根室支庁官吏を中心とした会員制による「共同根室文庫」の発足をみた。

本稿では、「戦前期根室地方における図書館の歴史1—花咲学校備付書籍室—」に続くものとして、「共同根室文庫」の実体がどのようなものであったのか、その全体像とともに活動の実際を中心に検証しようとするものである。

## 1. 共同根室文庫関係資料の概要

現在確認されている共同根室文庫関係資料は、大きく二つのタイプに

区分けできる。その一つは、印刷物として会員を中心に配布された資料で、これらには『緒言（設立趣意書）』『共同根室文庫第一回報告』『共同根室文庫規則』『共同根室文庫蔵書目』など 8 点がある。

いま一つのタイプは、筆書きの資料類で「根室文庫加入申込之事」「解盟御届」、あるいは寄贈図書リストなどが主な構成内容となっている。これら資料類は、いずれも個人もしくは団体（会社）から共同根室文庫宛への私信の形を示しており、その多くは件名を有しない断片的なもので、およそ 10 点ほどとなっている。

ところで、この二つのタイプに分けられる資料の総てが、一機関だけの所蔵とはなっていないので、ここに印刷体の資料について、その所蔵機関と所蔵資料名をまとめると別表のごとくである。

この表で明らかなように、資料の殆んどが美唄市立図書館の所蔵になるものである<sup>1)</sup>。このうち、『共同根室文庫同盟員氏名表』及び『同 追加』の資料が、北海学園大学図書館所蔵分と重複する。この北海学園大学所蔵の資料は、図書館付設の北駕文庫<sup>2)</sup>の一部を成すものである。

この北駕文庫に含まれている共同根室文庫関係資料は、裏に「浅羽靖」

図表 1 共同根室文庫関係資料所在一覧

資料名 \ 所蔵機関名	北海学園 大学図書館	北海道立 文 書 館	美唄市立 図 書 館
緒 言（設 立 趣 意 書）			○
共 同 根 室 文 庫 規 則			○
共同根室文庫第一回報告			○
共同根室文庫蔵書目		○	
共同根室文庫同盟員氏名表	○		○
同 上 追 加	○		○
共同根室文庫通常同盟之証			○
共同根室文庫特別同盟之証			○

名が印刷されている専用の封筒に納められている。封筒の表には、「明治18年根室県根室町図書館創立書」の上書きがなされている。この上書きにみる「根室町図書館」は、共同根室文庫を指し浅羽をはじめ、会員諸氏のなかには、将来の根室町公立図書館の設置を念頭においていたものと推察される。

このことは、これより先の明治13年函館における「思斉会が当初から函館に公立図書館の設立を目的として結成されたこと」<sup>3)</sup>とも考え合わせるとき、根室でも文庫設立の中核を構成する会員のなかには、この思斉会の存在を十分に意識していたものと考えられる。

浅羽は、明治17(1884)年5月根室県租税課長として赴任する前の1年間、大蔵省租税局函館出張所に勤務している。その折に浅羽は、思斉会の存在を知っていたはずである。あるいは、思斉会々員として入会していた可能性も否定できないが、残念ながら思斉会の会員名簿は、現在のところ確認されていない。

また浅羽は、北海道に来る以前は、大蔵省租税課勤務であった。浅羽は明治4(1871)年大阪から上京し、大蔵官吏の書生として苦学の時代も含め在京中は、当時の東京書籍館などの利用経験と図書館の実際をまのあたりに実感していたものと考えられる。

## 2. 共同根室文庫設立への動き

明治18(1885)年1月17日、根室住民に次のような呼びかけの文書が配布された。

### 緒 言

讀書ノ有益ナル喋々辨論スルヲ要セス方今文化日ニ開ケ人智歳ニ進  
ミ政治法律經濟ヨリ凡百ノ技術ニ至ルマテ新著ノ書籍陸續發行讀マ  
サル可ラス見サル可ラサルモノ甚タ多シ然リ而シテ我根室ノ地タル

北海ノ隅ニ僻在シ草創日尚ホ浅キヲ以テ市ニ書肆ナク家ニ藏書ナク  
且ツ碩學博識ノ人ニ乏シ故ニ書ヲ讀マント欲スルモ之ヲ得ルニ由ナ  
ク通セスシテ問フヲ得ス疑テ質スヲ得ス此レ吾人ノ常ニ憾ム所ナリ  
是ヲ以テ今同志相謀リ資金ヲ醖集シ和漢洋ノ書籍ヲ購求シテ之ヲ藏  
シ名ケテ共同根室文庫ト稱シ借覽ノ法ヲ設ケ以テ切磋講究ノ用ニ充  
テ吾人ノ便益ニ供セント欲ス此舉果シテ成リ人々其好ム所ニ隨テ之  
讀マハ則チ智識ヲ益シ見聞ヲ博クスル等其效益盖シ亦鮮少ナラサル  
ナリ有志ノ士冀クハ之ヲ贊助セラレンコトヲ依テ茲ニ其規則ヲ設ク  
ル左ノ如シ

首 唱 者

堀 貞 亨

明治十八年一月十七日

村 上 幹 當

渡 邊 長 謙

原 辰四郎

配布された文書は、共同根室文庫（以下「文庫」という）設立の趣意書にあたる『緒言』と、全 31 条から成る『共同根室文庫規則』及び追伸というべき『追稟』から構成されている。

呼びかけ人は、堀貞亨、村上幹當、渡邊長謙、原辰四郎の 4 氏で、いずれも根室県庁の吏員であり、かつ文庫設立の中核的役割を果たした人物たちである。

以下にこの間の経緯を『共同根室文庫第一回報告』<sup>4)</sup>（以下「文庫報告」という）で追ってみる。

明治十七年十二月堀貞亨村上幹當渡邊長謙原辰四郎等相会シ根室市中ニ一ノ文庫ヲ設立シ汎ク内外古今ノ書籍ヲ蒐集シ読書ノ便ヲ謀ラ  
ンコトヲ議定シ

と、まず発起人となる 4 人での文庫設立合意の経緯が報告されている。

次いで「仮ニ文庫規則ヲ艸シ」（「文庫報告」）と、のちの文庫発会式で審議された『共同根室文庫規則』の原案も併せ確認され、「十八年一月十七日印刷成り」<sup>5)</sup>「有志ニ頒ツ」（「文庫報告」）たものである。

この趣意に「賛成ノ諸彦ハ二月一日迄ニ首唱者四名ノ中へ御申込被下度尤賛成者五拾名ニ充ツルトキハ期日ニ拘ハラス直ニ發會ノ積リニ有之候」（『追稟』）と、当初発起人は 2 月 1 日をメドに賛同者 50 名程を目標とし、その後に発会式の予定でいたようであった。

#### 追 稟

賛成ノ諸彦ハ二月一日迄ニ首唱者四名ノ中へ御申込被下度尤賛成者  
五拾名ニ充ツルトキハ期日ニ拘ハラス直ニ發會ノ積リニ有之候  
發會ニ於テ文庫一切ノ規則ヲ確定スヘク本文規則ハ止タ首唱者ノ見  
込ヲ以テ創定致候ノミ固ヨリ杜撰ヲ免カレス  
文庫へ寄附及借用ノ書籍凡三百部餘ハ既ニ内約相整居候  
以上御領了ノ上御賛成被下度候也

明治十八年一月十七日

首唱者叩頭

ところが、「同月廿八日文庫設立ノ趣意ヲ賛同シ同盟スルモノ百五拾余名ノ多キニ及」（「文庫報告」）んだがために急遽「一月三十一日ヲ以テ發会」（「文庫報告」）式となったものである。

#### 稟 申

本月卅一日県庁内議事堂ニ於テ發会式施行委員ヲ撰挙候ニ付同日午後一時御臨会有之度候若シ御用繁ニテ御臨會相成兼候節ハ委員拾式名撰挙御申越相成度候

一月廿八日

首唱者

同盟員 御中

発会式は、「一月卅一日県庁内議事堂ヲ借用シ」（「文庫報告」）行われ、この日の賛同者の出席は「会スルモノ總テ六十四名」（「文庫報告」）で午後1時からの開催であった。

当日は、首唱者を代表して堀貞亨が参加者への謝意と開会の趣旨をのべた。会は堀が仮の会長として進行され、まず『共同根室文庫規則』（以下「文庫規則」という）原案の審議に入り一部修正のうえ可決された。

ただ、この時点で可決された「文庫規則」は、「文庫報告」によれば「一月卅一日總會ノ決議ニ基キ委員会ノ審議ヲ經テ文庫規則ヲ修正決定スル別冊ノ如シ」とありながらもこの別冊は、現在のところ確認されていない。

結局、「文庫規則」として現在確認できるものは、文庫設立の首唱者4人によって合意のうえ作成され、呼びかけの文書に添付された「文庫規則」の原案だけである。

従って、文庫設立の呼びかけの文書に添付された『共同根室文庫規則』は、厳密には『共同根室文庫規則（案）』とされるべき性格のものである。この原案ともいうべき「文庫規則」は、以下のごとくである。

共 同 根 室 文 庫 規 則

- 第一條 文庫ノ目的ハ汎ク内外古今ノ書籍ヲ蒐集シ閲覧ノ便ニ供スルニアリ
- 第二條 文庫ノ同盟ハ根室市街ニ居住スルモノハ何人ヲ問ハス加盟スルヲ得ヘシ
- 第三條 同盟員タラント欲スルモノハ住所氏名年齢職業ヲ記載シ幹事ニ申込同盟証票ヲ受クヘシ

- 但都合ニ依リ同盟ノ申込ヲ謝絶スルコトアルヘシ
- 第四條 書籍ハ部類ヲ別チ目錄ヲ作り書筐ニ藏スヘシ
- 第五條 借覽ヲ乞フモノハ借用証ヲ認メ幹事ニ申込ムヘシ
- 第六條 借覽ノ期限ハ每一回一周間内トス
- 第七條 文庫ハ當分ノ内幹事ノ私宅ヲ以テ之レヲ充ツ
- 第八條 借覽中紛失シタルトキハ原價若クハ現品ヲ以テ償フヘシ
- 第九條 借覽中太シク汚損又ハ毀損シタルトキハ相當ノ代償若クハ現品ヲ以テ償フヘシ
- 但シ表紙綴絲等ノ小破切離スルモノハ必ス借覽者ニ於テ補修スヘシ
- 第十條 書籍ハ同盟外ハ勿論同盟中ト雖トモ相互轉貸スルヲ許サス
- 第十一條 同盟員ハ書籍購求其他ノ雜費トシテ毎月十八日ヲ期シ金貳拾錢宛ヲ會計委員ニ納ムヘシ
- 但數月分ヲ一時ニ前納スルモ妨ナシ
- 第十二條 同盟員中ヨリ委員十二名ヲ撰挙シ其任期ヲ1ヶ年トス但改撰ノ節ハ現員ヲ再撰スルモ妨ナシ尤二次以上其撰ニ當ルトキハ辞スルコトヲ得
- 第十三條 役員ハ委員中ヨリ委員長一名幹事二名會計委員二名ヲ互撰ス
- 第十四條 委員長ハ文庫一切ノコトヲ總理ス
- 第十五條 幹事ハ同盟中一切ノコトヲ幹理ス
- 第十六條 會計委員ハ幹事ニ協議シ金錢ノ出納ヲ掌ル
- 第十七條 役員ハ俸給ナシ但シ幹事會計委員ニハ毎年二期 六月・十二月 委員長ノ指揮ニ據リ相當ノ報酬ヲナスヘシ
- 第十八條 幹事ハ同盟員ノ入退及ヒ書籍ノ増數其他一切ノコトヲ毎月末ニ報告スルモノトス



- 第十九條 會計委員ハ通常會毎ニ六ヶ月間ノ出納報告ヲナスヘシ
- 第二十條 書籍ノ購求ハ毎月一回トシ各其購求スヘキ望ミアルモノハ書名冊數著譯者及書肆ノ居所並ニ代価 代価不詳ナレハ凡積 等ヲ記載シ毎月五日迄幹事ニ申込ヘシ
- 第廿一條 毎月第二土曜日ヲ以テ委員會ヲ開キ各自申込ノ書籍ニ付キ評議ノ上之ヲ購求スヘシ
- 第廿二條 同盟ノ趣旨ヲ賛同シ金員書籍等ヲ寄付スルモノアレハ幹事之ヲ受領シ文庫ノ名ヲ以テ謝狀ヲ贈リ會員ニ報告スヘシ
- 第廿三條 毎年五月十一月ノ二期ヲ以テ通常會ヲ開キ諸規則其他文庫一切ノコトヲ協議スルモノトス  
但十五名以上ノ請求者アルトキハ臨時會ヲ開設スヘシ本文ノ期日並ニ會場等ハ幹事ヨリ報道スヘシ
- 第廿四條 事故アリ解盟セント欲スルモノハ幹事ニ申出同盟証票ヲ還付スヘシ
- 第廿五條 解盟スルモノヘハ既納ノ金員ヲ還付セサルモノトス
- 第廿六條 同盟中三ヶ月據金ヲ怠ルモノハ除名スヘシ
- 第廿七條 此規則ニ従ハサルモノハ委員會ニ於テ評議ノ上除名スルコトアルヘシ
- 第廿八條 同盟証票左ノ如シ

表	二 寸 分	第 何 号	輪 廓 唐 艸 模 樣 取	裏	割印	一 此票ヲ所持スルモノハ何時ニテモ書籍ヲ借覽スルコトヲ得 一 此票ヲ紛失又ハ汚損シタルトキハ書換ヲ乞フヘシ 年 月 日
		共同根室文庫同盟				
		氏 名				

豎 三 寸 五 分

- 第廿九條 書籍借用ノ証書左ノ如シ

誰	著	譯			
書	名		何	冊	
右	借	用	候	也	
年	月	日	氏	名	印

用 紙  
半紙ハツ切

第三十條 寄付人ニ贈ル謝狀左ノ如シ

但用紙中奉書ニツ切

當文庫ノ趣旨ヲ賛同セラレ 金何圓・書名何巻 御寄贈  
相成御懇篤ノ段鳴謝候也

年 月 日

共同根室文庫

何 某 殿

第三十一條 此規則ハ通常會ニ於テ同盟員三分一以上ノ同意ヲ得ル  
ニアラサレハ改定増補セサルモノトス

この「文庫規則」を、「文庫報告」にみる審議の議事録によって一部修正可決された条項部分を推定すると、次のごとくとみられる。

「第一条職業ノ二字ヲ削除ス」は、第三条の誤りで

第三条 同盟員タラント欲スルモノハ住所氏名年齢ヲ記載シ幹事ニ  
申込同盟票ヲ受クヘシ

と修正された。

「第六条毎一回ノ下ヘ一部(冊数アルモノハ幹事ノ見込ヲ以テ冊数ヲ限り)ノ数字ヲ挿入スル」は、

第六条 借覧ノ期限ハ毎一回一部(冊数アルモノハ幹事ノ見込ヲ以テ冊数ヲ限り)一周間内トス

となる(周は週か)。

「第十五条ノ二次以上其撰ニ当ルトキハ辞スルコトヲ得ルノ十八字ヲ削除スル」は、第十二条の誤りでかつ削除字数は二十字となり、

第十二条 同盟員中ヨリ委員十二名ヲ撰挙シ其任期ヲ一ヶ年トス但  
改撰ノ節ハ現員ヲ再撰スルモ妨ナシ

と修正された。

「第十七条委員長ノ指揮ニ據リ云々ノ趣旨ニ付衆論紛々タリシカ……  
通常会ノ決議ニ據ルノ修正説ニ可決シ末尾ヲコトアルヘシト改ムル……  
ニ可決セリ」とあるは、

第十七条 役員ハ俸給ナシ但シ幹事会計委員ニハ毎年二期六月十二  
月通常会ノ決議ニ據リ相當ノ報酬ヲナスコトアルヘシ

となる。

また、「第九条同盟票ノ裏書ノ中何時ニテモノ五字ヲ削ル……動機ニ可  
決セリ」は、

— 此票ヲ所持スルモノハ書籍ヲ借覧スルコトヲ得

と修正された。

以上が、「文庫報告」にみる発会式の議事録によった修正条項の部分で  
ある。続いて、「文庫規則 第十二条」により役員 12 名の選出にはいり、  
以下のとおり選出された。

堀 貞 亨 (根室県庁)	村 上 幹 當 (根室県庁)
渡 邊 長 謙 ( 〃 )	原 辰四郎 ( 〃 )
御子柴 五百彦 ( 〃 )	谷 口 和 敬 ( 〃 )
野 川 祐 吉 (実業家)	和 田 正 苗 (根室外八郡長)
秋 葉 静 (日本郵船)	湯 地 定 基 (根室県令)
小 野 保 (裁判所)	松 下 兼 清 (根室県庁)

なおこの選挙では、当初浅羽靖 (根室県庁) が選出されたが辞退し、  
松下兼清が次点繰り上当選となっている。

この選出された委員 12 名の、この当時の職業を ( ) で示したが、こ

れによると 12 名中 10 名が官吏で、かつその中で和田正苗は根室外八郡長の、小野保は裁判所長の役職にあった。また 8 名が根室県庁職員でかつ湯地定基は、知事職ともいべき根室県令の要職にあった。この 12 名の役員中 8 名が根室県庁職員であったことが、この文庫を支える同盟会員構成の中核であったことを示しているとともに、後にこの文庫の命運を左右する大きな要因ともなっているのである。

こうして、この日の発会式は午後 4 時過ぎ散会となった。

続く「二月二日委員会議ヲ開ク……規則第十三条ニヨリ投票ヲ以テ役員ヲ互選」（「文庫報告」）し、委員長に湯地定基県令が、幹事には村上幹當、渡邊長謙が、会計に野川祐吉、原辰四郎が選出された。

2 月 7 日開催の委員会では、「文庫規則 第七条」で「文庫ハ当分ノ内幹事ノ私宅ヲ以テ之レニ充ツ」ことになっていたが、「書籍部数既ニ三百余部ニ充ツルヲ以テ幹事ノ私宅ニ蔵置シ難ク且ツ別ニ取扱人ヲ置カサルハ書籍出納等自然覧者ノ便ヲ欠クノ感アリ」（「文庫報告」）として、文庫は「当分根室郡役所議事堂ノ一隅ヲ借用」（「文庫報告」）する件が協議された。

こうして、「二月九日根室郡長ニ書面ヲ出シ郡役所議事堂ノ一隅ヲ借用シ根室文庫ニ充テンコトヲ」（「文庫報告」）願い出、翌 10 日に使用許可が出されている。

これより先 2 月 7 日の委員会では、当初、文庫開設の場所として幹事の私宅を予定していたが、設置場所が郡役所となったがため、文庫管理人の件も併せ協議された。そしてこの件に関しては、「二月十二日……当時根室郡役所内ニ宿泊スル村山源右衛門ヲ文庫保管人トシ一ヶ月金五円ヲ報酬スル」（「文庫報告」）ことに正式決定された。

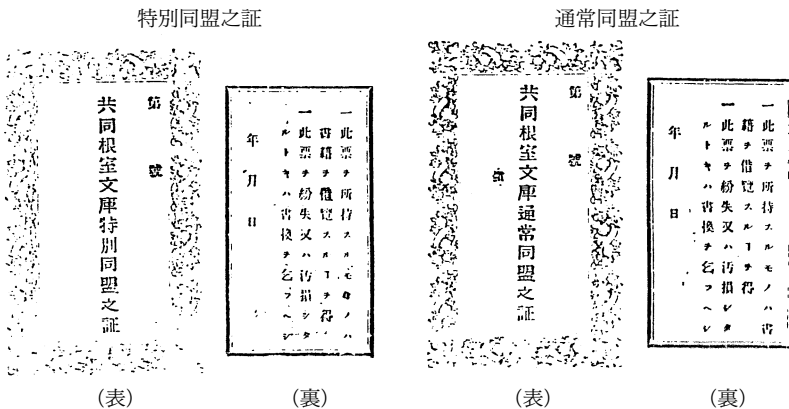
さらにこの日の委員会では、「総会ニ於テ議決セシ特別同盟員通常同盟員ヲ置クノ項ハ規則第十一条ニ追加セシ」（「文庫報告」）と、当初の同盟員を通常と特別の二種に分けての取扱いを協議している。

これは、先の「文庫報告」にみる1月31日の発会式での修正協議の記録にはない事項である。「総会ニ於テ議決セシ」とあるが、発会式以後、2月7日までの間に総会が開かれた記録も不明である。だが、事実は「同盟之証」として、「通常同盟之証」と「特別同盟之証」の二種類が確認されている。

「同盟之証」は、いわば文庫の会員証というべきもので、特別同盟員と通常同盟員の二通りとなっている。図表2では、唐草模様の輪郭の中に各々「共同根室文庫特別同盟之証」「共同根室文庫通常同盟之証」とあるが、「特別」と「通常」の違いだけである。裏面は、同一文面で

一此票ヲ所持スルモノハ書籍ヲ借覧スルコトヲ得  
一此票ヲ紛失又ハ汚損シタルトキハ書換ヲ乞フヘシ

とあり、この文面は、発会式当日に審議修正された文言とも一致している。「同盟之証」のサイズは、「文庫規則」にある縦3寸5分×2寸2分である。



図表2 「同盟之証」

こうして、文庫開館の条件が整ったのである。

### 3. 文庫の開館

文庫は、いつ開館されたのか定かではない。開館日を特定できる資料や記述も、現在までのところ確認されていない。さらに、文庫の利用を示す入館者数や貸出冊数、あるいは文庫を維持・運営すべき経費等のデータの類い一切が、やはり未確認である。

文庫は当初、幹事宅での開設を計画していた。だが、文庫として用意しておく書籍の調達が予想以上の数量となったため、幹事宅での開設を見送り、根室郡役所議事堂の一隅を借用願ひ出ている。その借用許可は、2月10日に下りている。

従って、文庫の開館日は、明治18年2月10日以降と考えるのが当然である。さらに、「文庫報告」では、文庫設立の準備段階から1月31日の発会式、そして2月12日までの動向を2月14日付でまとめられている。

この「文庫報告」でも、文庫の今後の活動日程等に関する記述がみえない。このことから、「文庫報告」がまとめられた2月14日の時点では、まだ文庫の開館日が具体的に確定できる状況になかったことになる。

つまり、文庫設置箇所は郡役所議事堂の一隅と決ったが、書籍收藏のための書棚、閲覧用机・椅子等の設備類の調達はどうかであったのか。そのための資金源はどうなのか。同盟会員の会費の納入状況は。あるいは、用意された書籍の利用手続きのための整理・配架方法等にいたるまで、いずれも開館前に早急に対処されなければならない課題があったはずである。

この文庫の開館に関しては、10点ほどある筆書きの文庫関係資料の中に1点だけ、この件に言及しているものがある。この資料は、文庫の幹事から同盟員宛の、以下の文面で件名はない。

本文庫之義ハ発会以後諸印刷之品及場所並ニ書篋硝入等ノ都合ニ拠リ追々遅緩ニ涉リ書籍閲覧之便ヲ欠キ不堪遺憾漸イ諸事全相整別紙報告之通ニ候間本日ヨリ御借覧相成度就テハ此際同盟票可及御配布之處總會之議決ニ拠リ規則第十一条之通同盟ヲ別チ特別通常之両盟員ニ區別相成候間兩種之内別紙御氏名ノ下へ御記載相成り候得者右區別ニ拠リ同盟票直ニ御配布可申右御報告およひ候也（…筆者）

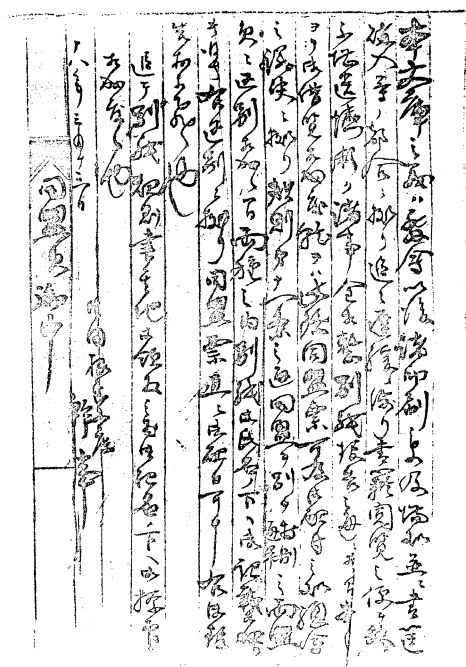
追テ別紙規則書其他御領収之後御配名ノ下へ御捺印相成度候也

十八年三月十三日

共同根室文庫

幹 事

同盟員御中



図表 3 「本文庫之義ハ……」

この文面によると、文庫は「遅緩ニ涉リ書籍閲覽之便ヲ欠キ」とあり、開館に至っていないことを伺わせている。その原因として、「発会式以後諸印刷之品及場所並ニ書篋硝入等ノ都合ニ拠リ」と、文庫の設置場所は根室郡役所議事堂の一隅と決ってはいたが、その他の設備類が整っていない状況であったと述べている。

「諸事全相整」といって、ようやく開館準備も整い「本日ヨリ御借覧相成度」と「本日」、つまり明治18年3月13日より文庫の利用が可能になったとしている。だがこの3月13日を文庫の開館日とするには、根拠としては裏付けが弱い。

それは、開館の条件が整ったことで、急遽総会で決定の同盟員を特別同盟員と通常同盟員とに区別の必要がでてきた。その「区別相成候間両種之内別紙御氏名ノ下へ御記載相成り候得者」から順次「同盟票直ニ御配布可申右御報告」となったようである。文庫の開館は、この一連の手続き終了後とすると、さらに明治18年3月13日以降ということになる。

またこの種のオープニングには、多少なりとも何んらかのセレモニーが用意されているのが通例であり、まして文庫が根室県令湯地定基を委員長とした、多数の県庁職員の構成となっている。従って、文庫の開館日は、この3月13日以降の遅くない日時に、改ためて設定されたものと考えられる。

従ってここでは、文庫を実際にどのように運営しようとしていたのか、「文庫規則」を中心に検証を試みる。

文庫は、その設置目的として、『緒言』によれば「根室ノ地タル北海ノ隅ニ僻在シ草創日尚ホ浅キヲ以テ市ニ書肆ナク家ニ蔵書ナク且ツ碩学博識ノ人ニ乏シ」いがため、「汎ク内外古今ノ書籍ヲ蒐輯シ閲覽ノ便ニ供スルニアリ」（「文庫規則第1条」）とある。

だが、その利用は根室在住者は誰でもとしながらも、実際は「文庫ノ同盟ハ根室市街ニ居住スルモノハ何人ヲ問ハス加盟スルヲ得ヘシ」（「文



庫規則第2条J)と、同盟という会員制を前提とする仕組みとなっていた。その同盟会員は、「書籍購求其他ノ雑費トシテ」月「貳拾錢」の会費を納めることになっている。いわば、これが文庫の維持費であったとみられる。

ただこの同盟員も、当初の原案が修正され、通常同盟員と特別同盟員との2種類となったが、実際にはその違いが会費も含め果してどのようなであったのかは明らかではない。

会員となった同盟員には、同盟証票が交付され、書籍の借用は1人1部（セット物には貸出し冊数に制限があったようだ）1週間が基本的単位であった（「文庫規則第6条」）。

#### 4. 『共同根室文庫蔵書目』

この『共同根室文庫蔵書目』（以下『蔵書目』という）は、文庫の蔵書構成全体像を知る重要な資料である。この『蔵書目』は、図表1にみるように、北海道立文書館所蔵の柳田家資料に含まれているものである。

柳田家資料は、根室在住の豪商柳田家代々の商業活動の記録で、それは「柳田商店の諸種の経営資料、参考とした図書類、書簡、写真類の総称」<sup>6)</sup>であるが、なかでも、初代柳田藤吉にかかわる資料がその中核をなしている。

柳田藤吉は、安政4年（1857）箱館（函館）開港とともに当地入りし、商業活動を開始した。「慶応4年7月箱館府生産方商法掛を囑託され、10月東京で生産方御用達を命ぜられ、明治3年2月には開拓使から外国輸出品調書手代を申しつけられるなど、官との接触を深め、御用商人的性格をも濃くしていった。その一方東京に北門社新塾、箱館に北門社郷塾を設け、生徒に無料で英漢学を教授するなど、慈善的・文化的事業を行っている。」<sup>7)</sup>

明治7年、柳田藤吉はその活動の拠点を根室に移すことにより、漁業

を中心とした事業で財を成し、根室地方に多大の貢献をなした。また一方では、根室最初の学校である官立花咲学校の創設に際しては、その建築費を寄附し、以後の病院、銀行などの設立、あるいは寺の建立、さらには図書館設置運動への参加など教育的社会的諸施設への財政的援助を通して、地域の振興にも力を注いでいた。

このような柳田藤吉の実績は、根室地方の水産界、実業界のリーダーとしての地位にとどまらず、やがては政界にもその活動範囲が広がるようになる。こうした商人の巾広い行動は、例えば函館においても「商人たちも、各人の事業の拡張をすすめるいっぽう、病院、学校の設置、公園の造成、新聞の創刊、私学振興および社会福祉施設の設置など函館の発展に大きく貢献している。」<sup>9)</sup>とあるごとく、開拓当時の北海道にあっては、漁業経済を中心として発展していた先進的地域で、少なからずみられた実績でもあった。

根室での柳田藤吉の、このような行動のパターンは、彼の北海道における経済人としての活動を、函館・江差・松前を中核とする経済的・社会的蓄積を背景とした先進地の道南地方に基盤を置いてスタートしたことにより体得したものであることは、十分に推察されるところである。『共同根室文庫同盟員氏名表』によると、そこには、柳田家2代目当主となった婿養子「柳田 豊」が同盟員として参画している。これは、初代藤吉の指導にもよる影響があったものと考えられる。

『蔵書目』は、B 6判、48頁、縦書の冊子体目録の形式をとっている。記載は、「共同根室文庫蔵書目」（共同根室文庫所蔵分）と「根室文庫へ当時借入ノ書目」（共同根室文庫借入分）の二部構成となっているが、刊行年月日は未記載で不明である。記述項目は、「著訳者氏名」「書目」「部数」「冊数」の構成順となっている。ただ、「部数」及び「冊数」の記述に一貫性を欠いており、また空欄もあることから、この『蔵書目』からの正確な部数あるいは冊数を数えることはできないが、筆者の読みに

図表 4 『共同根室文庫蔵書目』収録図書数

	部 数	冊 数
共同根室文庫所蔵分	106 部	324 冊
共同根室文庫借入分	184 部	795 冊
総 計	290 部	1119 冊

よって数えた内訳は次の表のごとくである。（『蔵書目』は《付 2》を参照）

一方、「文庫報告」によると、「文庫ハ当分ノ内幹事ノ私宅ヲ以テ之レニ充ツルノ趣旨ナレトモ書籍部数既ニ三百余部ニ充ツル」とある。そのうち「県庁及ヒ郡役所ヨリ当分借用セシ書籍ハ県庁ヨリ凡百四十八部七百九十三冊郡役所ヨリ七十五部二百七十三冊ナリ寄贈及ヒ借用ノ書籍別冊目録ノ通り」とある。この借用数の計は、223 部 1,166 冊となり、いずれにしても『蔵書目』の集計数とは大きな開きがある。

とすると、ここにみる「寄贈及ヒ借用ノ書籍別冊目録ノ通り」とある目録は、この『蔵書目』とは別の目録を指すのであろうか。だが、文庫の活動期間は、極めて短期間（？）であったことを考えれば、蔵書目録自体が何度も刊行されたとは考え難いことである。

ところで、この文庫関係資料のうち、筆書きになる資料のなかに、この図書目録に関すると思われる資料が 4 点存在する。このうち 3 点は、会員である和田、御子柴及び湯浅 3 氏の寄贈図書リストである。

もう 1 点は、東京博聞社名の野紙に記載されている図書リストで、根室県野崎良助宛となっている。このうち和田、御子柴及び湯浅 3 氏寄贈の図書リストは次のごとくである。

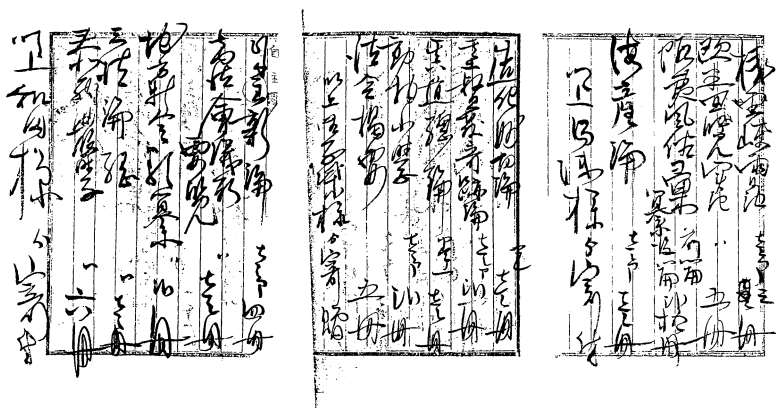
自主新論	壱部 四冊	造化妙切論	壱冊
商法会議所要覧	〃 壱冊	基督教奇跡論	壱部 貳冊

地方新令類纂	〃	貳冊	真道総論	巻ノ一	壹冊
三法論綱	〃	壹冊	動物小学	壹部	貳冊
泰西農学	〃	六冊	法令提要		五冊
以上	和田様より寄付		以上	御子柴様より寄贈	

棧雲峽雨日記	壹部	三冊
欧米回覧実記	〃	五冊
蝦夷風俗彙纂	前篇後篇	貳拾冊
海産論	壹部	壹冊
以上	湯浅様より寄付	

上記、3氏の寄贈図書は、『蔵書目』中の「共同根室文庫所蔵分」にも記載されており、その部数・冊数ともほぼ一致している。このことは、3氏寄贈図書が、文庫発会のための基本財産の一部として、蔵書目録作成にあたり収録されることになったものと考えられる。

一方、東京博聞社名での野崎良助宛図書リストには、書名、部数の他



図表5 和田・御子柴・湯浅3氏寄贈図書リスト（左より）

に金額の記載があり、これは図書の購入価格であるとみてよい。

図書リストの書名は、『蔵書目』中には該当の書名が見当たらない。また宛名とされた野崎良助は、根室県庁の職員ではあるが、文庫同盟員の名簿では見当たらない。名簿取りまとめ後の入会（加盟）の可能性も否定できないが、購入予定の図書リストとすると、野崎はどのような立場にあったのか。あるいは、文庫への寄贈を意図していたものなのか。図書リストは、次のようなものである。

損害賠償法原義	1 部	1 円 65 銭
利学正宗	3 部	7 円 12 銭
英国金融事情	1 部	1 円 15 銭
経済策	1 部	1 円 20 銭
経済要義	1 部	80 銭
羅馬法綱要	1 部	80 銭
譚海	1 部	55 銭
文明東漸史	3 部	3 円 21 銭 5 厘
民官証拠論講義一ヨリ七マテ	1 部宛	2 円 13 銭 7 厘
統計論 一編・二編	1 部	64 銭
独乙憲法沿革論	1 部	45 銭
圭氏経済学一・二卷	1 部	1 円 52 銭
英国証拠法	1 部	56 銭
扶桑画人伝	1 部	2 円 88 銭 9 厘
政治哲学論集一・二	1 部	1 円 12 銭 5 厘
経済学	1 部	65 銭
牲法講義	1 部	35 銭
法律大意講義	1 部	17 銭
佛国縣会纂法	1 部	37 銭 5 厘

孖国財産相続法	1 部	34 銭
英国財産相続法	1 部	26 銭 5 厘
詐欺説法	1 部	15 銭
独乙六法	1 部	16 銭
社会学之原理一ヨリハマテ	1 部宛	4 円 41 銭 6 厘
英国売買法	1 部	34 銭
佛国政法論	1 部	112 円 34 銭 6 厘
税法彙纂	6 部	118 円 94 銭
米国海上法要略	1 部	76 銭

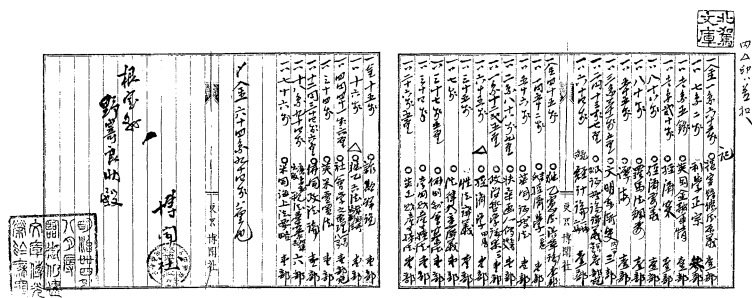
ノ金 164 円 94 銭 8 厘 也

博 聞 社 ㊤

根室県

野崎良助殿

この図書リストは、北海学園大学北駕文庫が所蔵する共同根室文庫関係資料に含まれるものである。いわば、同盟員でもあった浅羽靖が所蔵していた資料ということからも、文庫に関わる資料であるとみて間違い



図表 6 博聞社から野崎良助宛

はないであろうが、これ以上の確定的なことは言えない。

一方、「文庫報告」のなかに、次のような記述がみられる。

発会前後書籍及ヒ金員物品寄贈ニ係ル調左ノ如シ

一、金三円 堀 貞亨君

書籍 4部 23冊

一、書籍 5部 9冊 渡邊長謙君

印材 1顆

一、書籍 25部 122冊 松下兼清君

一、同 1部 3冊 中山誠一郎君

一、同 39部 125冊 旧蓋簪社

一、同 15部 24冊 榊原彌輔君

一、同 4部 9冊 御子柴五百彦君

一、書籍 18部 221冊 村上幹當君

一、書籍 5部 9冊 原 辰四郎君

一、書籍 4部 238冊 湯浅勝全君

一、同 9部 223冊 青山駒之助君

一、同 5部 214冊 藤井次郎君

一、同 2部 5冊 山本惣太郎君

一、同 7部 216冊 小野 保君

県庁及ヒ郡役所ヨリ当分借用セシ書籍ハ県庁ヨリ凡百四十八部七百九十三冊郡役所ヨリ七十五部二百七十三冊ナリ寄贈及ヒ借用ノ書籍別冊目録ノ通り

右報告及ヒ候也

共同根室文庫幹事

明治十八年二月十四日

渡邊長謙

共同根室文庫

同盟員諸君

このリストにみる発会式前後の寄贈された書籍数は、143部 441冊となっている。またこのリストにある御子柴及び湯浅両氏の数字は、先の寄贈図書リストにみる両氏寄贈分の冊数とも一致しない。つまり、両氏は少なくとも2度にわたり文庫に寄贈しており、このリストの数字は先の寄贈分とは、別とみるべきである。

文庫の発会式後、「文庫報告」がまとめられた明治18年2月14日時点での、その蔵書数に関するデータをまとめると、次のように考えられる。

まず「文庫報告」にある「寄贈及ヒ借用ノ書籍別冊目録ノ通り」とある「目録」とは、すなわち『共同根室文庫蔵書目』（付2参照）を指している。そして、この『蔵書目』は、明治18年1月31日の文庫発会式において、同盟員に頒布されたものと考えられる。つまり、文庫設立の首唱者を中心として、事前に収集・準備の調った分である<sup>9)</sup>。

従って、図表4『共同根室文庫蔵書目』収録図書冊数の「共同根室文庫所蔵分」106部 324冊は、寄贈等によって事前準備の調った分である。これに、「発会前後書籍……寄贈ニ係ル」分として、『蔵書目』に未記載分の143部 441冊が、2月14日までに追加されたことになる。

また、『蔵書目』中の「共同根室文庫借入分」もやはり、首唱者の努力により事前の県庁及び郡役所からの借入分である。これに、発会式後に追加借用した分も含め、「県庁及ヒ郡役所ヨリ当分借用シ」た書籍数が、「共同根室文庫借入分」184部 795冊にプラスした「県庁ヨリ凡百四十八部七百九十三冊郡役所ヨリ七十五部二百七十三冊」計223部 1,166冊である。（追加分は、『蔵書目』未記載）

これらをまとめると、文庫の明治18年2月14日現在での蔵書数は、



図表 7 「共同根室文庫」明治18年 2 月14日現在蔵書数

寄贈	『蔵書目』 発行前後	106部	324冊	共同根室文庫所蔵分	249部	765冊
		143部	441冊			
借入	県庁 郡役所	148部	793冊	共同根室文庫借入分	223部	1,166冊
		75部	273冊			
総計					472部	1,931冊

上の表のごとくになる。

明治 18 年 1 月 31 日の文庫発会式において、同盟会員に頒布された『蔵書目』では、蔵書冊数として寄贈分 106 部 324 冊、借入分 184 部 795 冊、累計 290 部 1,119 冊であった。

その後、2 月 14 日までに寄贈分が新たに 143 部 441 冊増加し、県庁及び郡役所からの借入分も追加された。結局、2 月 14 日現在で累計 472 部 1,931 冊の蔵書を有していたことになる。

## 5. 文庫同盟員

文庫同盟員の名簿は、図表 1 でみるように北海学園大学北駕文庫と美唄市立図書館との 2 館に所蔵されている。一つは、『共同根室文庫同盟員氏名表』の件名をもつ本表とでもいうべきもので、同一の名簿である。

同盟員証と同一の唐草模様に縁取られた一枚の用紙に、氏名がタテ書き 3 段で記載され、123 名が収録されている。氏名の終りに「稟申」が付されたものである。

### 稟 申

本月卅一日県庁内議事堂ニ於テ発会式施行委員ヲ撰挙候ニ付同日午後一時御臨会有之度候若シ御用繁ニテ御臨会相成兼候節ハ委員拾弐名撰挙御申越相度候

一月廿八日

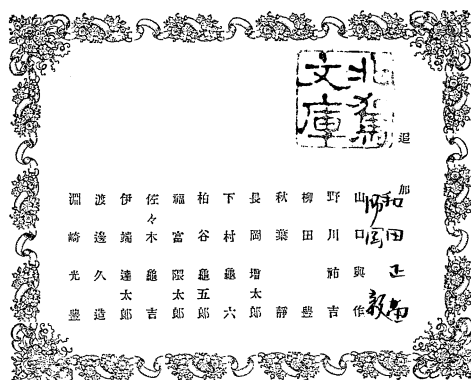
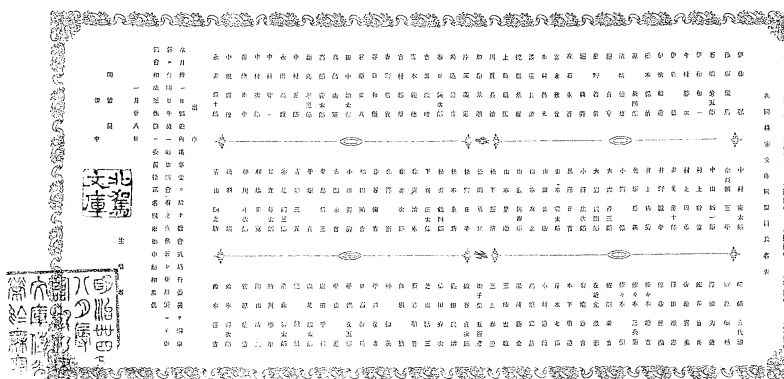
主唱者

同盟員

御 中

この「稟申」から、発会式直前の1月28日現在で、賛同者が123名に達していたことがわかる。首唱者の予想を大きく越えた反響といえる。

この後、さらに賛同者が増え、『追加』の件名で14名の名簿が作成さ



図表 8 『共同根室文庫同盟員氏名表』

れている。この追加分 14 名中、12 名は印刷された氏名で残り 2 名分は、筆書きの追加氏名となっている。この追加分の筆跡も同一とみられ、北駕文庫と美唄市立図書館とも同じものである。

ただ、作成月日の記載はない。だがこの追加分も発会式には、出席者に配布されたものとみられる。それは、発会式後の総会で選出された 12 名の委員の 1 人に選出された和田正苗（根室外八郡長）が筆書きでの追加の一人となっているからである。

この同盟員に関しては、この他に美唄市立図書館にのみであるが、追加分 35 名の名簿が存在している。この名簿も印刷されたものであるが、やはり筆書きになっている数名の加筆がみられる。

結局、文庫会員としての同盟員数は、北駕文庫と美唄市立図書館の両館に共通する 137 名の他に、美唄市立図書館にのみ存在する名簿の 35 名を加えた 172 名までが確認できることになる。

同盟員 172 名は、以下である。

#### 共同根室文庫同盟員氏名票

伊 藤 弘	飯 塚 幾 馬	石 橋 安五郎
伊 藤 和 一	今 村 勝 次	伊 藤 盛
伊 吹 鎗 造	橋 本 保 治	原 辰四郎
濱 崎 恒 雄	堀 貞 亨	星 野 義 信
堀 興 秀	友 石 重 吾	富 永 致 資
布 村 昌 光	渡 邊 長 謙	梶 原 景 雄
上 領 頼 匡	川 尻 兵 治	加 藤 景 順
片 岡 義 道	苅 込 岩 吉	春 日 鐘次郎
吉 田 政 明	寄 木 義 徳	吉 村 勝 雄
吉 野 信 資	谷 口 和 敬	谷 藤 善 八
田 中 治太郎	高 畠 由 憲	高 橋 養太郎

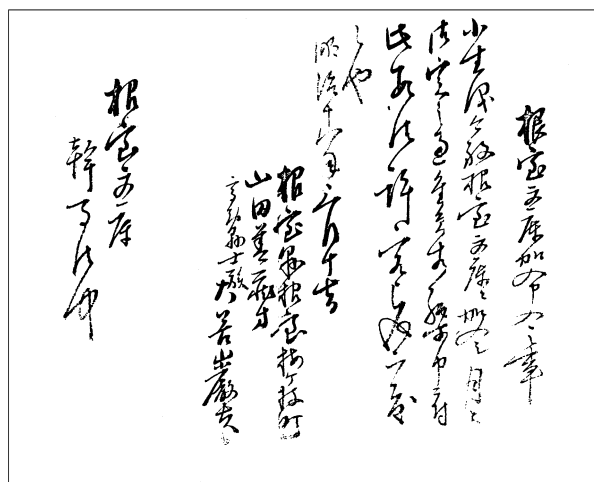
副 島 孝三郎  
中 村 守 一  
中 根 廣 修  
奈良坂 三 平  
村 上 與 作  
井 上 尚 芳  
大 森 彦三郎  
黒 沢 正 吉  
山 本 友 之  
松 下 兼 清  
松 本 重 為  
藤 井 治 幸  
藤 谷 彌 吉  
古 関 永 吉  
青 地 三 五  
相 場 正 寛  
青 山 駒之助  
沢 田 秀 造  
沢 田 祇 志  
佐々木 三兵衛  
左近允 景 影  
岸 本 七 郎  
湯 浅 勝 全  
御子柴 五 彦  
柴 田 弁 次  
白 須 勤  
日 高 啓 輔

中 村 五 郎  
中 村 次 郎  
永 井 新十郎  
中 山 誠一郎  
井 元 伝十郎  
鬼 塚 盛 義  
大 岩 武四郎  
山 本 惣太郎  
山 敷 與四郎  
松 岡 勇 記  
松 井 鶴四郎  
藤 井 次 郎  
福 田 祐 吉  
寺 島 信 三  
赤 尾 鑄三郎  
相 川 小次郎  
嵯 峨 喜代治  
佐 多 直 善  
佐 藤 豊 蔵  
佐々木 彌  
菊 地 亀 吉  
木 村 通 純  
三 浦 直 政  
塩 谷 貞次郎  
芝 山 浩 三  
神 知 英  
平 森 文五郎

永 田 高 致  
南 條 正 中  
中 村 密太郎  
村 上 幹 當  
井 野 数 平  
小 野 保  
小 沢 庄次郎  
山 田 善 助  
山 本 里 助  
松 野 正 辛  
下 司 庄太郎  
藤 沢 素  
小 出 秀 濟  
手 塚 貞  
足 立 每太郎  
浅 羽 靖  
榊 原 彌 輔  
斎 藤 實 美  
佐々木 總 吉  
佐 瀬 愛 直  
木 下 順 造  
湯 地 定 基  
三 上 春 豊  
篠 田 武 治  
新 藤 順 吾  
平 戸 房 吉  
平 山 進

廣 田 千 秋	森 尾 銀太郎	関 繁 根
清 藤 常太郎	助 川 順 平	陶 山 清 武
菅 原 龍 造	鈴 木 源次郎	鈴 木 峯 吉
追加		
和 田 正 苗	師 国 毅	山 口 與 作
野 川 祐 吉	柳 田 豊	秋 葉 静
長 岡 増太郎	下 村 亀 六	柏 谷 亀五郎
福 富 隈太郎	佐々木 亀 吉	伊 端 達太郎
渡 邊 久 造	淵 崎 光 豊	早 崎 春 香
渡 邊 周次郎	高 橋 健	中 谷 虎 雄
武 蔵 □ 助	熊 野 富太郎	吹 田 房次郎
佐 藤 長 三	島崎 重右衛門	関 秀太郎
西 田 守 信	吉 富 三 元	民 谷 重 蔵
中 田 時 宣	小 川 治三郎	山 縣 勇三郎
佐々木 勝 吉	菊 地 四 郎	廣 瀬 昌 柔
東 郷 重 成	吉 田 か ふ	椿 良 耜
納屋 孫右衛門	尾 形 定 吉	眞 壁 清八郎
佐 藤 平 太	三 澤 立 造	森 井 金 吾
平 野 隆 輔	工 藤 三 次	斉 藤 實 新
高屋敷 元太郎	村山 源左衛門	須 貝 留 吉
大 谷 巖 吉		

ところで、筆書きの文庫関係資料のなかに、文庫同盟員への加入と退会に関した資料が各 1 点存在する。加入に関しては、



図表 9 「根室文庫加入申込之事」

# 根室文庫加入申込之事

⑨

小生儀今般根室文庫ニ加入シ月々

御定之通金員相納可申ニ付

此段御許容被成下度

候也

明治十八年三月十七日

根室県根室梅ヶ枝町

山田善蔵方

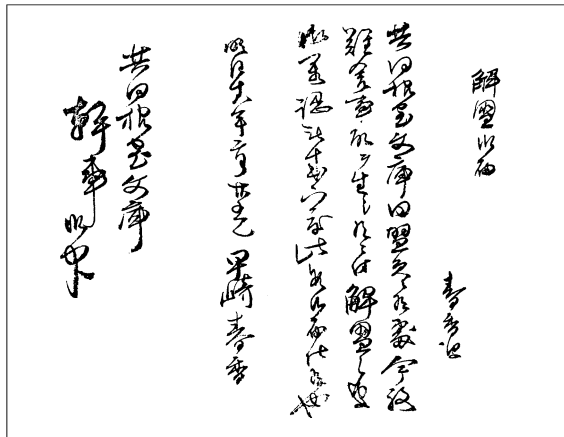
高知県土族 大谷巖吉 ⑩

根室文庫

幹事御中

申込年月日は、明治 18 年 3 月 17 日で加入申込者は、大谷巖吉とある。この氏名は、美唄市立図書館所蔵の 35 名の追加分名簿にみえる人物である。このことから、大谷巖吉は同盟会員 172 名に含まれてはいるが、掲載の 35 名分追加名簿は、1 月 31 日の発会式以後に配布されたものであることが分る。㊦は、首唱者の一人原辰四郎の受領を示したものであろう。

また、文庫退会に関わる資料としては、



図表 10 「解盟御届」

### 解盟御届

春香儀

共同根室文庫同盟員ニ候處今般  
難捨事故ヲ生シ候ニ付解盟之義  
御承認被成下度此段御届仕候也

明治十八年二月廿五日 早崎春香 ㊦

共同根室文庫

## 幹事御中

この「解盟御届」の早崎春香名は、やはり美唄市立図書館所蔵の35名の追加分名簿に、その名前がある。このことから、文庫発会式直後に加入し、ほどなく退会の事態となったことを2月25日の日付が物語っている。

先に述べたように文庫の開館日について、「本文庫之義ハ発会以後諸印刷之品及場所並ニ書筐硝入等ノ都合ニ拠リ」、当分の間未定であった。だが、「諸事全相整」うとともに、同盟会員を特別同盟員と通常同盟員とに区分けが急がれた。

この二種の同盟員の区別は、原則的には同盟員の申告によるものであったようである。美唄市立図書館所蔵の名簿には、二種に同盟員を区分けする作業を行ったとみられる記入が残されている。氏名の上に「特」又は「通」の筆による書き入れがあり、氏名の下には㊤の押印が残されている。ただこの書き入れは、40名程が未記入となっている。

同盟員を特別と通常に区分けする基準は不明である。特別同盟員となっている会員氏名は、名簿順に堀貞亨、渡邊長謙、村上幹當、小野保、松下兼清、榊原彌輔、佐々木總吉、湯浅勝全、御子柴五百彦、和田正苗、野川祐吉、三沢立造の12名である。

この中に、同盟員役員が8名入っているが、他の4名については、同盟会員の中での立場が不明である。また役員中でも、委員長湯地定基、首唱者の1人原辰四郎については未記入となっている。

これらのことから、この名簿における特別同盟員、通常同盟員の区分は、その作業が完了前の資料といえる。いずれにしても、残りの未記入者も含めても、特別同盟員は限定的範囲での設定であったと推察される。

ところで、同盟員名簿172名の当時の職業を綿密に調査報告<sup>10)</sup>された



資料がある。それによると、

根室県庁	75 名	郵便局	2 名
根室郡役所	3	小学校教員	3
裁判所	3	民間・自営業	23
根室監獄	4	不明	52
警察	4		

内訳全体では、民間・自営業の 23 名と不明 52 名以外の 97 名は、いわゆる公的職業の関係者で占められ、全体の 56.4%に当る。さらにこのうち、根室県庁と郡役所の職員が合せて 81 名になる。いわば文庫同盟員の 47%を構成する数となっている。

また小学校教員 3 名は、いずれも花咲小学校教員もしくは元同校教員である。このことは、当然のごとく花咲学校備付書籍室の消長を体験しているはずであり、文庫に対しての強い参加意識が推察させる。

ところで、この同盟員名簿中には、この後の根室地方を中心として、地域の発展に貢献した多くの先人の名前が見られる。ここでは、特にその後の北海道図書館界にとり大きな足跡を残した二人に触れる。一人は浅羽靖であり、もう一人は御子柴五百彦である。

浅羽靖<sup>11)</sup>は、明治 17 (1884) 年 5 月根室県租税課長として赴任、まもなく根室県の廃止により同 19 (1886) 年 2 月、北海道庁理事官として根室支庁次長に昇任した。だが同年 12 月札幌区長及札幌外八郡長として、根室在任わずか 2 年余で札幌へ転出した。

札幌転出後は、明治 20 (1887) 年 6 月北海英語学校校長に就任。さらに明治 34 (1901) 年北海中学校を創立し、以後も私財を投じて学校法人北海学園の基礎を築いた。

明治 44 (1911) 年、北海中学へ皇太子の行啓を受け、これを記念して私蔵する書籍、和漢書約 3 万 1 千冊、洋書・雑誌約 1 万冊、軸物 119 点

をもって北駕文庫を創設、同年 11 月石造文庫を開館した。浅羽の根室在勤は 2 年余と短期間ではあったが、その間、多くの書類の控を残し、それらは貴重な資料として北駕文庫に収められており、この共同根室文庫関係資料もその一部である。

御子柴五百彦<sup>12)</sup>は、明治 15 年根室県属警部から同 17 年根室外九郡長、ついで網走、釧路等の道東方面を中心に転任、同 27 (1894) 年には北海道庁教育課へ転出している。札幌に転任後は、北海道教育会会員となり、この間、同評議会に「書籍館設置の件」<sup>13)</sup>を議題として提出している。この件は、実現されなかったが、さらに明治 32 (1899) 年に「図書館の設立を札幌区に望む」<sup>14)</sup>の一文を「三五四八生」で新聞投稿している。

このように、御子柴は根室以後も図書館に関わって、積極的に提言をし、特に北海道教育会の図書館設置に関しては、教育会々員として積極的な関与がみられるのである。御子柴のこうした図書館へのこだわりは、明治 5 年に上京し書生としての苦学時代も含めた図書館利用経験が背景としてあったものと考えられる。

## まとめ

文庫の設立を提唱した 4 人の首唱者たちは、『緒言』の中で「方今文化日ニ開ケ人智歳ニ進ミ」「新著ノ書籍陸續発行」されているにも拘らず、「我根室ノ地タル北海ノ隅ニ僻在シ草創日尚ホ浅キヲ以テ市ニ書肆ナク家ニ蔵書ナク且ツ碩学博識ノ人ニ乏シ故ニ」文庫を設置し、住民の読書環境を用意するにいたった。

彼等の図書館に対する意識は、いついかなるときに萌芽したものであろうか。これを知るカギは、例えば堀貞亨の場合をみると、彼の在京時代に動機があるとみられる。

堀は、初め開拓使東京農業課に勤め、この時に東京府書籍館の借覧特

許状の交付を受けている。当時は、東京書籍館が財政的事情もあり、文部省の所管から東京府に移った直後であったが、東京府書籍館の書籍の帯出に関しては、「書籍ノ帯出ハ知事ノ特許状ヲ附与スル者ニ限り許之」（書籍帯出例規）とされていた。

北海道立文書館所蔵の明治 10 年の記録によると、東京府知事楠本正隆と開拓大書記官西村貞陽間の往復文書がある。それによると、開拓使吏員堀貞亨の東京府書籍館の書籍帯出願いに対し、「特許状ハ堀四等属へ相渡之事」<sup>16)</sup>と、明治 10 年 5 月 3 日付東京府知事より西村貞陽宛の文書が確認できる。

また原辰四郎は、明治 13 (1880) 年からの東京久松小学校教員を経て明治 15 年には、函館県においてやはり小学校教員となり、明治 17 年に根室県学務課に転任している。この間、原もやはり東京あるいは函館での図書館経験の機会を得ている。

首唱者堀と原二人の図書館経験が、根室における文庫設立への大きな原動力となったものであろう。また村上、渡邊の二人についても経歴の詳細が不明ではあるが、やはり何れかの時点での図書館との接点は、否定できないと考えられる。

さらに、同盟会員の多くに、例えば花咲小学校教員をはじめ同盟員の中には、その経歴からみて根室居住以前に、図書館の時代的社会的重要性を認識する機会を持ったと推察される人物たちが参加している。このことも、文庫設立への大きな原動力の一つであった。

ところが、明治 19 (1886) 年 1 月 26 日、文庫にとり思わぬ事態の展開が生じた。布告をもって三県一局（函館・札幌・根室の 3 県及び農商務省北海道事業管理局）が廃止され、北海道庁へと機構改革されたことである。

このことにより、文庫の委員長でもあった県令湯地定基が札幌へ転出するなど、実質的に文庫の中核となっていた人物たちを欠くことになっ

た。いわば文庫としての機能不全に陥ったことである。図書館の持つ社会的機能によって醸成されるべき地域の文化的社会的基盤が、文庫設置の過程半ばにしての挫折という地域の基層の稀薄さを露呈したことになる。また同様の事態を迎えたのは、函館における思斉会もまた然りであった。

文庫の動静に関しては、先に同盟会員を特別と通常の二種に区分けの作業を通知した3月13日付文書以後は、全く不詳である。

だが文庫の首唱者たちは、開館に向け努力をしていたものと思われる。根室県は、文庫開設を後押しするかのごとくに、明治18(1885)年5月19日付で『町村立私立書籍館設置廃止規則』<sup>16)</sup>を定めた。

この根室県の動向は、図書館設置を時代の方角性として認識した結果であり、北海道では、この時代の文化的・経済的先進地であった函館県の『学校幼稚園書籍館規則』(明治16年4月9日制定)に続く2例目である。だがこの根室県の規則は、函館県の場合と異なり図書館の設置廃止に関する単独の規則であるとともに、その設置については、認可制としたことが特徴といえる。

この後、共同根室文庫がどのような変遷を辿ったのか、このことを知る資料が一切不明である。文庫設立前後の動静を語る資料は、北駕文庫と美唄市立図書館に共に共通して存在しながら、その後の文庫の推移については、直接的関係資料が未確認であることに大きな疑念を抱かせるのである。

唯一、以下の新聞記事のみである。

#### 根室文庫の再興

全文庫は根室支庁の廃止後廃滅の姿となり数千部の書籍も空しく函中に蔵めたる儘保存し置くのみにて縦覧を許さざりしが斯くは無用

に帰するのみなりと此頃文庫再興の議起り目下有志者に於て其計画  
中なりと云へり<sup>17)</sup>

結局、共同根室文庫は、首唱者をはじめとした関係者の尽力にもかかわらず、開館されることなく自然休止の状態となったものと考えられる。

## 注

- 1) 『毎日新聞』昭和 38 年 3 月 1 日夕刊「本道最初の図書館」「根室の（共同文庫）」の見出で紹介され、その存在が明らかになったものである。これによると、匿名の市民から美唄市立図書館へ寄贈された関係資料類で、これによって共同根室文庫の存在が、更めて関係者の間で注目された。
- 2) 北駕文庫は、北海学園大学の前身である北海中学の創設者・浅羽靖の所蔵資料を中心として、明治 44 年 8 月設立されたものである。浅羽靖は、大蔵省の役人として函館（明治 16 年）から明治 17 年 5 月根室県に転出し、ここで共同根室文庫の設立に通常会員の一人として参画している。
- 3) 坂本龍三「函館地方における図書館の発達 その 1」『短期大学図書館研究』第 5 号 1984.3 p.3-15
- 4) この報告は、発会式の後日、つまり明治 18 年 2 月 14 日付幹事渡邊長謙、村上幹當 2 人の連名でまとめられ会員に配布されたものである。
- 5) この時期の根室における印刷事情としては、明治 15（1882）年根室県令湯地定基により東京から印刷機械を購入し、鳴海町に印刷所が設置されたのが根室地方における印刷業の始まりとされる。その後、開拓使末年に佐々木総吉に払下げられ、民間印刷業となったとされている。このことからみると、この明治 18 年 1 月からの「文庫報告」をはじめとする一連の文庫関係の印刷物も、この根室県による官設の印刷所によるものと考えられる。
- 6) 『柳田家資料（1）文書』北海道立文書館 1986.3 p.VII
- 7) 同上 p.II

- 8) 坂本龍三 前提書 p.6
- 9) これを裏付けるものとして、首唱者 4 人による文庫設置の呼びかけに頒布した文書『緒言』の「追稟」では、「文庫へ寄附及借用ノ書籍凡三百余部ハ既ニ内約相整居候」とあり、すでに『蔵書目』への収録の準備が整っていたものであろう。
- 10) 堀内紀子、本田克代「戦前までの根室の図書館の歴史」『根室市博物館開設準備室紀要』第 8 号 p.77-79 1994.3
- 11) 浅羽靖 (あさば しずか) 嘉永 7 (1854)・1.8～大正 3 (1914)・10.22。摂津国東成郡玉造村 (現、大阪市東区玉造) に、大阪城定番与力岡渡の 3 男として生まれる。慶応 3 (1867) 年浅羽軽の養子となる。明治 4 (1871) 年上京、苦学して大蔵省租税寮十五等出仕、収税課に勤める。明治 16 (1883) 年租税局函館出張所、同 17 年 5 月根室県へ赴任。その後明治 19 (1886) 年 12 月札幌に転出、札幌区長及札幌外八郡長となったが、明治 27 (1894) 年退官、以後私学教育に尽力。大正 3 (1914) 年 9 月藍綬褒章を受けるも、同年 10 月東京で死去、享年 60 歳。
- 12) 御子柴五百彦 (みこしば いおひこ) 安政元 (1855)・12～大正 2 (1913)・7.11。会津藩士戸枝一郎左衛門の 5 男として江戸に生まれる。その後、御子柴家の養子となり、藩校日新館に学ぶ。明治 5 (1872) 年上京。同 7 (1874) 年警視庁巡査となり、同 12 (1879) 年沖縄県御用掛、同 15 (1882) 年根室県属兼警部となる。その後、網走、紗那、釧路、厚岸、浦河を転任、同 27 (1894) 年北海道庁教育課へ移る。さらに、上川支庁第一課長を経て、明治 37 (1904) 年からは、新冠、静内両郡各戸長などを勤める。大正 2 (1913) 年東京で死去。享年 58 歳。
- 13) 『北海道教育週報』第 22 号 明治 27 年 11 月 3 日 p.2  
北海道教育会評議員会  
全会は去る三十日午後六時より豊平館に於て開会せらる。是れ本年四月総集會に於て撰定せられたる評議員の第一回集會にぞありける。……頓て會議は開かれたり。……第三問本會に書籍館を設置するの件は全しく御子柴氏の提出なるが其方法に就きての細則なければ單に其必要を述べ

るのみでは、可否決定し難しと云ふに決す。

14) 同上 第 201 号 明治 32 年 2 月 19 日 p.1

○寄書 図書館の設置を札幌区に望む 三五四八生

幌都は北海道の首府として中央政府の所在地として実に殷富繁榮の都市と称すべし、文明的の機関は大概具備せざるなし

而して区の施設経営に係るものは遊園地の外一と口之なきなり（小学校及病院は別ものとして）従来設置し来りたる幼稚園までも廃したるは区は公共事業に冷淡なりとの評を下さるるも之を弁解する辞なきに苦む所なるべし

故に此所一番大奮発して本年は是非に図書館の設置を計画せられんことを望むなり抑も図書館設立の必要なる単り学生生徒のみに止まるにあらず、商家も工芸家も諸業衆庶の男となく女となく老若貴賤上下となく大ある利益を與ふるものなればなり

欧米諸国に於ては広き都会には数十ヶの図書館を設立し如何なる僻村寒村にも之なきはなしと云ふ其詳かなる状景は北海道教育雑誌第七十二号（三十一年十二月刊行）に寺田勇吉氏の割切なる論説を転載あり願くは幌都の有志諸君眼ある有志諸君は之を閱し給ひ又図書館設置の位置に就ても生は説なきにあらず則ち札幌区の中央なる大通西三丁目を以て適當のヶ所となすなり、近来大通の草原（中央の）の事に付ては区の共有財産にするとか、或は何々部或は何の某等が頻りに此地を得んと欲し密かに運動するものありと聞けど公益なる図書館の敷地として之を付與するは道庁に於ても更に吝ならざるを信じ又他に於ても聊か異論なきは疑はさる所なり、請ふ区民及ひ当局者共に奮励せられんことを乞

15) 「書籍館書籍借覽特許狀ノ件」『明治十年開拓使公文録 三府往復』（北海道立文書館所蔵 簿書番号 No.5857-35）

16) 根室県『明治 18 年根室県布達 上 自 1 月至 5 月』

甲第貳拾七号

町村立私立書籍館設置廃止規則別冊之通相定候條此旨布達候事

明治十八年五月十九日

## 根室県令湯地定基

### 町村立私立書籍館設置廃止規則

第一條 町村立書籍館ヲ設置セントスルモノハ学務委員ニ於テ戸長ト協議シ郡町村総代人ノ評決ヲ經テ左ノ事項ヲ詳具シ郡長ノ調査ヲ經テ県令ノ認可ヲ受クヘシ

第一項 設置ノ目的

第二項 位置

第三項 名称

第四項 開館閉館ノ規則休日參觀人心得等

第五項 書籍ノ種類部数等

第六項 敷地建物ノ坪数並ニ図面

第七項 経費収入支出

第二條 私立書籍館ヲ設置セントスルモノハ第一條ノ各項ト設立者ノ族籍姓名年齢ヲ詳具シ戸長ノ與印ヲ請ヒ郡長ノ調査ヲ經テ県令ノ認可ヲ受クヘシ

第三條 町村立私立書籍館設置ノ後第一條ノ各項若クハ私立書籍館設立者ノ変更ヲ要スルモノハ其事由ヲ具シテ県令ニ伺出ツヘシ

但第七項ハ経費増減ノ為メ事業ノ伸縮ニ影響スルカ又ハ経費収入ノ方法ヲ改ムルモノニ限ル

第四條 書籍館ヲ合併若クハ分離セントスルモノハ其町村立ニ係ルモノハ第一條私立ニ係ルモノハ第二條ノ手續ニ從ヒ県令ノ認可ヲ受クヘシ  
但町村立書籍館ノ合併分離ハ従来資産ノ処分方ヲ詳具スヘシ

第五條 書籍館ヲ廃止セントスルモノハ其町村立ニ係ルモノハ学務委員ニ於テ戸長ト協議シ郡町村総代人ノ評決ヲ經テ廃止ノ事由ト資産ノ処分法トヲ詳具シ郡長ノ調査ヲ經テ県令ノ認可ヲ受クヘシ私立ニ係ルモノハ廃止ノ事由ヲ詳具シテ戸長ノ與印ヲ請ヒ郡長ノ調査ヲ經テ県令ニ開申スヘシ

17) 『北海道毎日新聞』第 605 号 明治 22 年 7 月 20 日 p.3



《付 1・共同根室文庫関係年表》

- 明治 17 (1884). 12 堀貞亨、村上幹當、渡邊長謙、原辰四郎「共同根室文庫」設置を協議
- 18 (1885). 1. 17 「共同根室文庫」設立を住民に呼びかけ
1. 31 「共同根室文庫」根室県庁議事堂にて発会式
2. 2 「共同根室文庫」第 1 回委員会開催 委員長湯地定基選出
- 7 第 2 回委員会開催 文庫規則、文庫設置場所、管理人給料、特別同盟員の件協議
- 9 根室郡長宛に郡役所議事堂一隅を共同根室文庫に充てることを願出
- 10 根室郡長より願出許可さる
- 12 郡役所内に宿泊する村山源右衛門を文庫管理人に決定 俸給一ヶ月金 5 円
3. 13 文庫開館準備整う
5. 19 根室県「町村立私立書籍館設置廃止規則」定む
- 22 (1889). 7. 20 共同根室文庫再興計画

《付 2・『共同根室文庫蔵書目』》

共同根室文庫蔵書目					
著者氏名	書目	部数	冊数	全	中根室一
林包明著	政治論綱	一部	一冊	全	中根室一
モリスワロフ著 根岸晃三郎譯	調警察志	一部	一冊	全	中根室一
名村泰蔵口譯	佛國詠語法講義	一部	一冊	全	中根室一
大島貞徳譯	英政治革命志	一部	一冊	全	中根室一
大須地盛譯	領萬國公法	一部	一冊	全	中根室一
田中東助校閲	獨字政典	一部	一冊	全	中根室一
中根室一		一部	一冊	全	中根室一

共同根室文庫蔵書目

著者氏名	書目	部数	冊数	全	中根室一
宮田高慶遺述	蝦夷今昔物語	全	一冊	全	中根室一
青山延于著	皇朝史畧	全	八冊	全	中根室一
田島泉二著	平賀源内實記	全	一冊	全	中根室一
松村操編	山陽象山言行録	全	一冊	全	中根室一
松村操編	血亭遺稿	全	一冊	全	中根室一
渡邊修次郎著	明治開化史	全	一冊	全	中根室一
井上哲次郎著	倫理新説	全	一冊	全	中根室一
堀本甚三郎編纂	人權新説駁論集	初編	一冊	全	中根室一

著者氏名	書目	部数	冊数	全	中根室一
加藤政之輔著	本朝政體	一部	一冊	全	中根室一
改進黨		全	一冊	全	中根室一
官版	萬國公法	全	六冊	全	中根室一
高橋達郎譯	英國憲法論	全	一冊	全	中根室一
福澤諭吉著	民情一新	一部	一冊	全	中根室一
開拓使	蝦夷風俗彙纂	全	二十冊	全	中根室一
本多省三譯	蝦夷風俗彙纂	全	二十冊	全	中根室一
阿千復全編	米利堅志	全	一冊	全	中根室一
河野通之	法蘭西志	全	二冊	全	中根室一
高橋二郎抄譯	法蘭西志	全	二冊	全	中根室一

竹添光鴻著	棧雲峽雨日記并詩草	全	三	冊
高橋陳人重訂	日本忠臣庫	全	全	
兼好法師作	徒然草	全	二	冊
任天主人校閱	佛國美談	全	一	冊
無盡藏書齋	通俗伊蘇普物語	全	三	冊
主人講述	柳橋新誌	二	二	冊
成島柳北藏著	男女愛情論	一	一	冊
合田 忍著	隅田川梅柳新書	一	一	冊
亭主人	青砥藤綱撰稜按	全	一	冊
曲亭馬琴				

千葉繁露述	造化機論	全	二	冊
田中 頼昭撰	三條演義	一	一	冊
井上撰一郎評註	増補蘇批孟子	全	三	冊
時多道士挑選	絶倒詩選	一	三	冊
山陽劉文勳君稿	詩韻含英	全	三	冊
桂林先生問	幼學詩韻	全	一	冊
源暉展校訂	正文文章軌範	全	六	冊
岡千 仞著	北海詩草	全	一	冊
太政官	權待命金米歐回覽實記	全	五	冊

四

山本 廣太著	無學異話	一	一	冊
金井貞直藏	刪補和漢年契	全	一	冊
服部 誠一著	東京新繁昌記	全	一	冊
服部 誠一著	東京繁昌記	全	一	冊
ト部 廣著	地球精圖	一	六	冊
高橋達彦纂輯	自主新論	全	一	冊
天野 岐福撰	商法會議所要覽	全	一	冊
須原鉄二編輯	地方新令類纂	全	二	冊
小笠原美治編輯	三法論綱	全	一	冊

花柳粹史編	鶯谷於梅仇討	全	一	冊
曲亭馬琴著	大和莊子蝶々草	全	一	冊
武田 安泰記	霜夜鐘十字辻占	全	一	冊
中山 興一譯	理財論	全	一	冊
林武一纂輯	貨幣貿易要論	全	一	冊
若山 藤一譯	自由交易穴探	全	一	冊
シモン・トス著	海産論	一	一	冊
森源 應校正	雅俗幼學新書	全	二	冊
司法省藏版	法律語彙	全	一	冊

六

羅澤謙吉立案	木下周一譯	原田潛著	只野龍次郎著	仁美木澤村郎次郎編	白石貞吉編輯	福島縣	譯ワニルベフ氏口	股橋厚美編纂
通俗外交論	國權論	財產平均論	治罪手續	治罪法詳解	治罪問答	公布類纂	法學指鍼	官民必携
全	全	全	一				全	
一	四	一	一	九	六	二十一	二	
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	

松永源七著	元老院藏	板垣退助立案		阪根正夫編輯	松本駒次郎譯	英國底寧口述	英國底寧口述	英國底寧口述	精力義一譯
治罪法手續	會員必讀	通俗無上政法論	造化妙工論	法律摘要	動物小學	眞道總論	基督教育跡論	泰西農學	
全	一部	全	全	全	一部	卷ノ一	卷ノ二	全	
全	一冊	一冊	一冊	五冊	二冊	一冊	二冊	六冊	

八

岡千仞著	櫻州山人著	小永井八郎評	藤誠子監著	原田綺三編輯	船橋振露述	查理諾萬南布著	織田完之著	師岡國編輯
尊攘紀事	漫遊記程	新評戲曲十種	蘇長公論策	北海道廻瀾錄	火葬論	政學階梯	水滸梁考	三菱會社內幕秘文錄
全	全	全	一	知	全	全	全	一
四	三	二	部	篇	一	二	全	一
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊

十

波理模兒著	前田正名述	城谷謙著述	其作麟詳譯述	阿部泰藏譯	大隈重信撰	金九鐵編輯	小笠原美治編輯	租稅局
經濟要論	直接貿易意見一班	小學經濟論	學校通論	修身論	北支那戰爭記	法律雜誌	治罪法便覽表	稅則提要
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	一	全	二	三	三	七十二	一	一
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊

七


全	全補遺	全
福澤諭吉著	時事小言	全
獨春郎著	北窓瑣談後編	一冊
渚生重章著	近世偉人傳	四冊
高須聖浦著	函館繁昌記	二冊
近藤麟三譯	母親ノ心得	二冊
片山平三郎譯	造化秘事	二冊
菊地純著	本朝處初新誌	三冊
風來山人著	風來六々部集	二冊
全	全	全
全	全	全
全	全	全
全	全	全
全	全	全
全	全	全
全	全	全
全	全	全
全	全	全

十二

根室文庫へ當時借入ノ書目			
著譯者氏名	書目	部数	冊数
文部省	史畧	一部	四冊
伊藤希元編輯	評註漢史提要	三冊	四冊
柳河春陸岡	西史概要	全	冊
福地萬世譯	佛國古今通史	二冊	冊
秋山政為譯	合衆國小史	四冊	冊
クートリツ著	國史綱鑑	十冊	冊
桑田親五譯	標記本朝通鑑附錄	二冊	冊
加藤照撰	大規模之校正	全	冊
林 恕編纂			


三十一

田口卯吉著	日本開化小史	一	部	三	冊
森 一 步 譯	萬國史	全		二	冊
駒藤鳴俊本編次	二十二史畧	全		八	冊
譯太政官翻譯係	日本西教史	全		二	冊
	萬國史	全		一	冊
小水井八郎編	漢史一斑	全		四	冊
大槻文彦譯述	羅馬史畧	全		十	冊
或島信會編輯	南山史	全		三	冊
飯田忠彦譯修	日本野史	全		七十二	冊
竹中邦書校					

二十四

野村榮編輯	家道訓	全		二	冊
木戸麟編輯	小學修身口授書	全		十二	冊
王 陽 明 著	傳習錄	全		四	冊
西田周正先生久生譯聞	小學道德論	全		三	冊
小林義則編輯	小學孝鏡	全		全	
池田通世位正	小學修身新編	全		十	冊
總 生 寬 著	勸善口授	全		二	冊
木戸麟編輯	小學修身誦讀書	全		十一	冊
今井運久編輯	修身格言	全		七	冊

浦野直輝編	女今川	一	部	一	冊
關 菰 編	女大學	全		全	冊
川原益軒校原正著	刪定家道訓	全		二	冊
上羽摩斷纂	勸孝通言	全		一	冊
文 節 著	童女筌	全		二	冊
其作麟詳譯述	自然神教	全		四	冊
久松義典編纂	啓蒙修身學	全		八	冊
山下直溫集撰	皇朝蒙求	全		三	冊
青山延于編	明徵錄	全		五	冊

二十六

矢野文雄譯	英米禮記	全		一	冊
	朱氏治家格言兒訓	全		全	
淺溪周先生著	通 書	全		全	
懷遠張先生譯著	西 銘	全		全	
陸處朱先生著	白鹿洞書院揭示	全		一	冊
坪井龍直春同譯	弗氏生理書	全		七	冊
關藤成緒譯	星學捷徑	全		三	冊
三崎臨助譯	試驗階梯	全		七	冊
文 部 省	各形金石試驗兒	全		一	冊

須川 賢久 譯	中江 篤介 譯	文 部 省	瓜 生 見 實 著	水 野 行 敏 著	和田 隆 四郎 編	松三 水崎 之盛 之 譯	柳 原 芳 野 編	宇直 川 康 一 校 譯
具氏博物學	維氏美學	思想之法	諸氏材力論	土木學	晶彩學	試驗升屋	文藝類纂	理化小誌
全	全	全	全	全	全	全	全	全
十	全	全	全	全	一	二	八	一
冊					冊	冊	冊	冊

二十九

佐々木 隆興 譯	文 部 省	山崎 三郎 譯	川本 清一 譯	文 部 省	宮崎 柳 條 著	片 付 兼 行 著	リッラル氏口授	池田 英氏口授
解剖學動脈篇	定質分析	多氏定量分析	物理學	天文學	器械新書	靜重學	化學日記	日講紀聞
全	全	全	全	全	全	全	全	一
二	全	全	一	全	二	一	六	部
冊			冊		冊	冊	冊	十一冊

二十八

大井 憲太郎 譯	島田 三郎 譯	編 輯 寮	關 義 臣 編 著	高橋 達郎 譯	小林 義則 編 著	小笠 原 利孝 譯	糸井 隆吉 抄 譯	小橋 萬次郎 譯
州長論	立法論綱	語 彙	經史論存	泰西經濟論	家政小學	魯氏經濟論	小學經濟論	英氏經濟論
全	全	全	全	全	全	全	全	全
一	四	十四	十五	八	全	全	二	九
冊	冊	冊	冊	冊			冊	冊

三十

西村 茂樹 譯	日下部三之助編纂	箕作 麟 譯	岸田 吟香 訓 點	伊能 忠敬 測定	佐澤 太郎 譯	大隈 修二 編	岡 生 監 實 譯	永峰 秀樹 編 著
經濟要旨	家事經濟訓蒙	統計學	富國策	大日本沿海實測論	勞氏地質學	日本地誌要略	地質學	博物小學
全	全	全	全	全	全	全	全	一
全	二	十	三	十四	二	五	二	部
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	三冊

三十

大井憲太郎譯	州會篇	一	部	二	冊
全	佛蘭西邑法	全		全	
全	參事院篇	全		一	冊
大島貞益譯	法學議義節約	全		二	冊
神田孝平譯	和蘭司法職制法	全		一	冊
全	全州法	全		全	冊
全	全邑法	全		二	冊
馬屋原彰譯	全議員撰舉法	全		一	冊
元老院刊行	刑法一覽表	全		全	冊

二

小林國義秀譯	日本教育史略	全		一	冊
文部省	米國學校法	全		二	冊
石橋好一譯	小兒養育談	全		一	冊
伊河津太助之譯	佛國學制	全		十	冊
文部省	理事功程	全		一	冊
全	小學算術書	全		五	冊
小林龍秀譯	馬耳蘇氏記簿法	全		全	
川上寬纂譯	西畫指南	全		全	
	圖法階梯	全		八	冊

三十一

伊藤圭助著	日本物產志	一	部	十一	冊
杉亨二編纂	辛未政表	全		二	冊
開拓使	公文鈔錄	全		一	冊
渡邊修永郎著	外交始末	全		全	冊
林樂知著	中西關係論	全		五	冊
岡田勇譯校正	西洋茶果調理法	全		一	冊
文部省	國史案	全			
其作麟祥譯	佛蘭西治罪法	全		五	冊
全	訴訟法	全		八	冊

三十四

全	全	全		五	冊
全	民法	全		十六	冊
京都醫藥講習會著	三魏文鈔	全		三	冊
土城錦村顯彰	宋詩合璧	全		四	冊
風裏子成著	山陽遺稿	全		八	冊
曾茶山先生著	黃葉夕陽村舍詩	全		十一	冊
安藤銀葉譯	壯游堂文集	全		全	
鳳山陽撰	李忠定公集鈔	全		二	冊
汪兆銘文選要	汪兆銘文選要	全		全	

三十一



磯本紀伯編著	村瀬輝彦編	石齋源保蔵	明訓士崎撰	石川為憲合撰	岡三農著	森風輝原評	青山延壽編	岡規景寛著
黎園遺草	唐荆川文粹	蘇東坡絶句	刪訂古今文致	日本文章軌範	文章軌範明辨	清名家文鈔	燭篋小集	全帯集
全	全	全	全	全	全	全	全	全
二	四	三	二	三	全	全	四	六
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊

金本和郎書	小原寛栗卿	荒川元校字	錦安徳中天然風草紙	谷口延有編録	奥貝沈斎書	石川安貞註	大槻磐翁著	黒神直臣編
梁山堂詩鈔	鐵心遺稿	愛日樓文	國朝廿四家文鈔	慶應新選詩鈔	芥舟學畫編	陸宜公全集註	近古史談	箋註續衆求校本
一	全	全	全	全	全	全	全	全
部	三	四	八	三	四	九	四	三
二	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊

三十六

一時軒儀中	杏花岡主人著	藤井徹著	田島繁二述	佐藤信之校増補	築時公園	岡村正盛補関著
消閑雜記	シミノスマカ物語	南畝夢言	果木栽培法	書林庫	土性辨	清國近世風記
全	全	全	全	全	全	全
一	全	二	全	三	二	一
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊

遠山雪峯如編	松林義規編	吉嗣達太郎註	信夫纂著	林長壽	来里西城縣藩	村田徹典編	輝良郷仙輯	明治詩史
玉池吟社詩	飯山文存	寒玉音後集	恕軒文鈔	鶴梁文鈔	松塙文鈔	唐宋八家手翰	文章遊戯	文章遊戯
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	二	全	全	全	一	全	全	一
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊

三十九

近藤芳樹輯	冷野集	一	部
蘇風集	二	冊	
狹衣	五	冊	
拾遺和歌	四	冊	
加多比左志	二	冊	
縣門遺稿	五	冊	
清水波臣校	全	冊	
飯沼窓齋著	新訂草木圖說	二十	冊
岡田巖高著	閑田耕筆	四	冊
	三義雜記	全	冊

荒野文雄著	日本品行論	一	部
大橋直著	東京新詞	全	冊
	宇治拾遺物語	全	冊
多興彦校訂	他山石	全	冊
曾名節撰	百首意見	全	冊
青山堂編輯	肥長電信録	全	冊
錦誠情之進譯	金馬	全	冊
全	水運	全	冊
全	百工儉約訓	全	冊

中洲仙史撰	陶犬新書	全	冊
賀茂貞顯著	南朝新葉集	全	冊
櫻園大人著	縣居雜錄補抄	全	冊
吉尾泰雅撰	不磨舟	三	冊
中島一男編纂	活花園大成	二	冊
宮昌秀序	清廿四家詩	全	冊
佐藤信季著	年山記聞	全	冊
佐藤信光述	漁村維持法	一	冊
	農政本論	全	冊

全	全	全	冊
全	金百科人口救済及保險	全	冊
全	衣服及服式	全	冊
全	近世詩史	全	冊
全	今世名家文鈔	全	冊
全	西洋英傑傳	全	冊
全	三橋惇喜譯	全	冊
全	大沼子厚壽著	全	冊
全	枕山詩鈔	二	冊